

また、奥地の開封方面からの在留邦人が大勢引き揚げ、病人に対し軍医が随行し往診した折、引き揚げの模様を聞き、気の毒で頭が下がる思いがした。ご婦人等は男装もし魔手を逃れ、命からがらの引揚げであった。また、病人に困ったとか、涙をのんで血を分けた子供を手離して来たとか、すべて涙の物語りであった。

我々衛生隊は、すべての業務を閉鎖し、捕虜収容所に移動、入所することになったが、周囲はバリケードで囲まれている。

昭和二十一年三月下旬、乗船命令が出て、無事目的地に着いた。出港三日、LSTは旧佐世保軍港に入港。「やっと帰ることができた」という。

「全国の戦災地地図」を見ると自分の郷土も被災していた。

三埠攻略戦記

東京都 山崎 純夫

波濤万里を蹴りて衝く

白耶土湾に月しろく

時、神無月十二日

奇襲上陸ここに成る

青史を飾るこの朝

勲は永遠に薫るかな

あゝ我等南支派遣軍

広東に上陸以来、この軍歌を何十回、何百回歌ったことだろう。軍歌演習に、行軍に、そして今では戦友会の席上でも歌われる。

昭和十八（一九四三）年一月一日、広東に上陸以来、丸三年六カ月、南支、中支に駐屯もしくは抑留されていたことになる。

広東上陸

昭和十八年一月一日、第五百五十七連隊から将校及び下士官若干名と第九次補充兵が到着し、節兵団の独立歩兵第六十六大隊に配属された。九次の補充兵は昭和十七年九月、新潟県の村松連隊に応召し殆どが同年で現役兵と同じ年頃である。宮城、福島、新潟の健児を主体とし他に東京、埼玉の出身者を交えていた。

独立混成第二十二旅団の誕生

昭和十七年十二月十三日、軍令陸甲第一〇七号により独立混成第二十二旅団の編成が命ぜられ、ここに第二十二旅団の誕生をみた。これは、第一独立歩兵隊の独立歩兵第六十六隊、同七十、同七十一大隊を基幹とし独立歩兵三個大隊、山砲兵大隊、工兵中隊、通信中隊各一を以て編成された。

昭和十七年十二月十二日、編成着手、同日十七日、広東市に於いて編成を完結した。

旅団長は陸軍少将米山米鹿（陸士三二期）参謀

は陸軍中佐新村実栄（陸士三十三期・陸大専科出）、高級副官高谷中佐、次級副官は陸軍中尉渡辺清（元第三中隊第四小隊長）であり、参謀一本科将校を予定していた。部付将校一六、准士官一（竹川原作元第三中隊第二小隊長）下士官三〇、兵七六人、軍属一であり、衛生下士官五、一般兵一、兵技兵一を不足していた。

なお、司令部内には参謀部、副官部、兵器部、経理部、軍医部、獣医部の他に護衛一個小隊（清水三郎少将）が配属されていた。

その他、馬匹は充足し、兵器資材においては定数を充足させるも、程度稍々不良で中以下、諸器材及び兵器修理用資材も概ね充足完備していた。

司令部は広東の長堤路、珠江北岸の元伊黒支隊本部（YMCA）跡に位置していた。

独立歩兵第六十六大隊の状況

我々が配属になった独歩第六十六大隊の状況について若干の説明をする。

昭和十七年十二月十七日、独立混成第二十二旅団隷下の先任大隊として再発足したのである。これに前後して将校、下士官、兵の補充も概ね完結していた。先に野戦貨物廠要員として南支に到着した兵員の一部は我が大隊の手によって教育完了し、第八次補充兵として各隊に配属になった。

この補充要員は昭和十四年八月の補充兵と徴兵年度はほぼ同じであり、東京出身者が多く、また最高教育を受けた者も多数あり、後に司令部、本部、指揮班等の事務要員としてその才能を発揮した貴重な存在であり、助手として事実上の事務機能の中樞をなしたのである。

そこに第九次補充兵が到着したのである。第二、第三の補充兵であったため、体力は充分と言えなかったが、体力、気力、就中、職務に忠実な困苦欠乏に耐える優秀な素質を持っていた。これが歳月を経るに従い錬磨され末期の湘桂、広西の撤収作戦においてその実力が遺憾なく発揮され、中隊の中心兵力になっていったのである。

独歩第六十六大隊（井上部隊）の第四中隊には見習士官の山崎純夫、安藤軍曹、川邊軍曹、田丸伍長兵数十人が配属された。更に二月中旬、春日少尉が第四中隊に配属になった。

昭和十七年九月に編入された将校、下士官に続き、将校の補充により部隊人事は大幅に改編することとなり昭和十四年、二、五、八月の補充の下士官兵は、第八、九次補充要員と交替し、将校もまた、各中隊長、副官を含めた移動があった。

本部教育主任加藤幸夫大尉、大隊副官岩永中尉、情報主任産形中尉、主計細野少尉、軍医西川中尉、毛利中尉。

第一中隊長 柴田中尉

第二中隊長 金子中尉

第三中隊長 坂入中尉

第四中隊長 村山中尉

歩兵砲隊長 松井少尉、三沢少尉である。

村山中隊長は十一月末広州駅を立ち内地へ、松井少尉、元吉、五味両軍曹は補充兵宰領のため内

地へ発った。

広東の生活

兵の能力向上の為、訓練につぐ訓練は当然のことであるが、現地事情を知るため、示威行軍、部落偵察、中山陵の観光等いろいろ盛り沢山の行事を計画、実行した。

日曜日になれば交替のトラックで広東市内まで出向き、映画、京劇、中華料理の食味三味、名勝古跡の見学等結構休日を楽しんだ。

実弾携行という点を除けば、ほとんど内地の兵営生活と遜色はない。将校という特権を利用すれば月に一回の外泊も可能だった。しかしそれは所謂、点と線の中の生活に限られていた。それでも数カ月に迫った湘桂作戦に較べれば天と地の差だった。将校も下士官も兵もそんな気配を察せず広東の兵営生活を楽しんだ。楽しいことばかりではない。大隊の射撃競技会での優勝を期し、昼夜を分けぬ猛訓練、毎日の駆け足、サンパンを操る

練習、と激しい訓練は絶えない。

中園中将第三飛行師団長機の誤射事件で他中隊から笑いもの的となった。中隊長の功名心からP 38機に墜落された中将機が、我が重機関銃により墜落と大隊本部に報告したのである。後始末が大変だったらしい。

また、帰還間近の兵主体に三山附近の土匪討伐を行い成果をあげたのも内地へのよい土産話になった。

善きにしる、悪きにしる広東時代の一年の訓練と休養がその後の戦闘の原動力となったことは否定できない。

日本を巡る状況

広東で訓練と小討伐に巡り明け暮れている中に日本を巡る情勢は大きく変化していた。

昭和十八年九月、イタリアが無条件降伏し枢軸国の一角が崩れた。

昭和十八年二月、ガダルカナルから撤退、五

月、アツツ島部隊玉砕、十月から十二月にかけて数次にわたりボーゲンビル島沖の航空戦が繰り返された。

昭和十九年になると南洋群島の諸要塞で玉砕がつづいた。一方ビルマ戦線でも敗退を重ね、遂に米軍はフィリピンを奪回した。次の米軍上陸地点は、内地か、沖繩か、中国が緊急の事柄になってきた。南方と中国と内地を結ぶ幹線の確保が緊急時となった。

浮上したのが大陸打通作戦である。常德作戦、京漢打通作戦、洛陽攻略作戦、湘桂作戦、靈宝作戦、湘桂（ト号）作戦、福州作戦、芷江作戦等である。

我が節兵団もこれに加わり作戦に出勤した。当時、下級将校の身で最後の決戦になるとは夢にも思わず、警備専門の部隊から、戦闘部隊に昇格し、作戦に参加するぐらいにしかわなかつた。

部隊の移駐と配備

大隊は第二百五大隊（田賀）と警備交替をして、江門、新会地区の警備となり、一年間警備した広東を離れた。

第一中隊は砲一門を配して新会県城に位置し、第二中隊（金子隊）は江鶴公路馬山を警備していた。第三中隊（小鷹隊）は江門北方篁村警備隊となった。我が第四中隊（根津隊）は予備隊として市内に駐屯していた。

大本営は在米軍基地奪取と大陸縦貫輸送路建設の一日も早い完成の必要に迫られていた。平行して第二十三軍でも師団、部隊の新設、隷属部隊の編成に忙殺された。

独立歩兵第十三旅団（直）が編成され、我が大隊から一個中隊の基幹要員を出し、その際多くの悲喜劇があった。直兵団は合計人員、五、九八七人（他に軍属四）馬匹三〇九頭であった。直兵団は当初南方作戦要員と示唆されたが広東周辺の警備を受け持つことになった。

直兵団へ転属した補充として、将校・下士官・

次の補充兵が各隊に配属された。我が中隊は四月上旬、四階建ての新兵舎から沙燕に移動した。水田に囲まれた小部落で、路地をへだてて部落民と同居したが何のトラブルも起きなかった。

各中隊とも、訓練をかね蠢動する敵を急襲、討伐を繰り返した。我が中隊も第三中隊と協力し石頭の匪賊の討伐を行った。

宮沢准尉が第三中隊小隊長に香川曹長が指揮班長にそれぞれ就任した。宮崎軍曹は熱病に地位軍曹は腸チフスで江門野戦病院で死亡する。

湘桂作戦第一期

(一) 一号作戦または「ト」号作戦)

一号作戦とは「湘桂作戦」「粵漢作戦」「京漢作戦」及びその他関連作戦の総称である。湘桂(衡陽―桂林) 粵漢(広東―衡陽―漢口) 京漢(北京―漢口) は皆鉄道名であり、各地要地域に多くの在支米軍基地が含まれている。一号作戦は昭和十九年四月―五月九日の京漢作戦により開始され、

第十二軍は南部京漢鉄道を打通し北・中支の戦線を結んだ。

続いて湘桂作戦であるが「湘」とは湖南省であり、「桂」とは広西省、「粵」とは広東省のことである。従って第十一軍(呂集団)が湘から桂へ、第二十三軍(波集団南支派遣軍)は粵から桂へと行動を起し、柳州攻略はむしろ南支軍によると予定されていたのである。

一号作戦実施については、昭和十九年一月「大陸命第九二一号」をもって発令されたのである。

昭和十九年六月頃、第十一軍をもって武漢地区から攻勢を開始する。第二十三軍は六月末頃、一部をもって北江に沿い作戦して第七戦区軍を牽制し、第十一軍の作戦を容易ならしめる。七月末頃第二十三軍をもって広東地区から作戦を開始し第十一軍と呼応して敵を撃破し、桂林及び柳州附近を攻略したのち、湘桂・粵漢両鉄道沿線の残敵を掃討して、これを占領確保する。主要作戦期間を約五カ月と予定する。状況によりその後、遂川

(広東北北東六七〇キロ)及び南雄(広東北々東二四〇キロ)附近の敵飛行場を覆滅する。

状況の許す限り昭和二十年一、二月頃第二十三軍をもって南寧付近を攻略し、桂林・諒山(南寧南西一七五キロ)を打通確保する。このようにして湘桂作戦第一期は、第十一軍によって口火が切られた。

南支軍の行動

敵情

第七戦区(余漢謀長官)のもとに、第十二集團軍と第三十五集團軍があり、その司令部は広東北方約二〇〇キロ北江上流の韶関にあり第三十五集團司令部は広東西方約一五〇キロ、西江上流の徳慶にあった。

作戦構想

第一期には、第二十二師団の一部をもって北江西岸に作戦して、第十一軍の衡陽攻略に策応して敵を牽制する。

第二期前段は第四百師団(鳳)は西江北岸、第二十二師団及び独混第二十二旅団(節)は西江南岸をまず梧州南北の線に向かい進出させる。

後段、九月初旬、第十一軍と呼応し一斉に柳州に向かい作戦し第四百、第二十二兩師団と、柳州南西方に独混二十二旅団を向ける。同二十三旅団は来賓、遷江地で側翼を援護する。

第三期は、一部をもって南寧に作戦する。また作戦第二期には海軍と協同して、西江水路を平定し補給を推進する。

独立混成第二十二旅団の状況

旅団は四月上旬、直兵団に警備地域を委譲し、江門地区に集結した。

江門 司令部、独歩六十六大隊、独歩七十一大隊、山砲大隊、工兵、通信諸隊

新会 独歩百二十七大隊

古井 独歩百二十五大隊

中山 独歩百二十六大隊

本作戦では軍の北上作戦を秘匿し、かつ第二期

作戦の準備、特に常水口（江門南西三五キロ）を占領して、台山県城を攻略、同地域を占領して物資を収集して軍の西進行動の左側背を安全にするよう指示されていた。

旅団編成以来一カ年余であるが、独歩第六十六大隊、同七十一大隊以外、軍単位の作戦参加の経験はなかった。しかし各大隊長は古参の大佐、中佐が多く、旅団長及び部下の信頼はあつかった。

下級将校・下士官・兵の素質・装備、輸送に懸念がもたれた将兵の素質に、大隊により格差があり、優良大隊は主方面、激戦方面に当たらせられることが多かった。

特に輸送面における劣勢は甚だしく、数百人の軍夫を徴用し臨時輸送隊を編成し輜重隊に代えた。しかし各隊ともその監督、統制には苦心した。

四囲の情勢、第十一軍の作戦に協力のため三埠攻略戦の幕が切つて落された。

昭和十九年六月二十四日、旅団は単水口に進出、引き続き他兵団は六月二十七日、日没後第一期攻勢を発起した。

（二）三埠攻略

兵団は進発の命を下し、独歩第六十六大隊は前衛となつた。

作戦第一の労苦は敵との交戦でなく炎暑と重い装備との戦だった。調練の期間もあり、練成に努めたが事務系の者、新規加入の第十次補充兵等にとつて厳しさと辛さは格別のことだったと思う。

日射病で倒れる者が続出した。六月下旬の照りは強かったが、午後大驟雨に見舞われ多くの兵は蘇生した。第一日の宿営は平地嶺附近で斜面を利用し仮睡した。驟雨後の天候は曇り夕刻には霧雨となった。その反面、側営隊は一気に増水した小川の渡渉を不可能にし、本隊との併列を狂わせた。

第二日の朝は日照を見た。丘陵を降り渡河準備

三埠攻略戦

（一）作戦発起

がとられていた。工兵隊の舟艇は既に組みたてられエンジンも取付けられた。各舟艇に分乗した時、右側台地より軽機を含む射撃音、弾着は水面にしぶきをあげた。

歩兵砲はこれに対して砲撃、暫時にして沈黙せしめたのである。各隊は次々と対岸に上陸、態勢を整えて進撃を開始した。

単水口は眼と鼻の先にある。第一の目標は、この街であった。敵艇身縦隊の本拠でもある。しかし、我が大隊に対する攻撃はこの程度の微弱なもので、逐次西方へ後退していった。兵団主力は、単水口より青坦河を渡河し、対岸の公益埠を攻略後、台山県城目指しての進撃であった。森田、小屋通の両大隊は旅団司令部を擁して、我が大隊と分かれていった。大隊は単独で三埠攻略の命を受けた。敵は西方に後退し、我が軍は細雨の中を散開、神前寺部落、神前里等を次々に占拠していった。

本格的な雨になり、軍靴は水浸しになり、泥濘

に足をとられ、労苦は倍加する。漸く、宿泊の場が決まった。既に三埠に近い。明日の長沙攻略戦に備え、敵の反撃、夜襲も覚悟しなければならぬ。要点に分哨を出す。マメの治療、銃器の手入れ、夕食準備、衣服の乾燥等、兵には休む暇もなかった。

大隊本部から各隊に命令が到達したのは夜半過ぎだった。各中隊の連絡下士官は、一、二人の護衛兵を連れ各隊に連絡する。敵が、敵性住民がどこにいるか分からない。連絡がつくと大隊本部へ復命のため戻る。大変な任務である。

命令文に、明朝〇五〇〇集合とある。既に二四〇〇を過ぎていた。〇三〇〇起床せねばならぬ。兵は濡れた被服のまま泥のように眠っていた。

翌日、愈々三埠を目標しての進撃である。赤松のそびえた丘陵脇の道路に集結した各中隊。雨は上がったが道路はぬかっている。

尖兵第三中隊を先頭にして出発。第二中隊は右側衛として梁金山地に行く。部落の切れ目切れ目

から、右側台地の前方を敵の小隊が我が主力に添うように移動している。尖兵第一小隊は部落を楯として、軽機関銃、擲弾筒により先制攻撃をかけ、敵は山麓の丘陵により応戦する。敵は射撃しながら西南方に退いていく。第二中隊は後方から追ひ、第三中隊は側面からこれを射つ。敵は遂に算を乱して後方へ退却していった。

午後、いよいよ三埠（長沙・新昌・荻海）攻略が命ぜられた。この榮譽ある任務は根津中尉を中隊長とする我が第四中隊が担当することになった。

根津中隊長は直ちに部下将兵を率い、敵前渡河を決意、渡河地点附近に進出する。水面上に数本の発煙筒による煙幕を張り、工兵隊の協力により、舟艇で渡河を強行、対岸に上陸、直ちに散開、一斉に前面台地中腹にある敵陣地に突入、これを制圧する。敵は我が勇猛果敢な攻撃に恐れをなし、いち早く陣地を放棄退却した。地形絶対不

利な本戦闘に於いて、幸運にも、一兵も損することなく、見事緒戦を飾ることができた。

部隊長も大いに喜び、速やかに態勢を整え、更に前進した。日没になり、附近部落に宿営し明日の戦闘に備える。

六月二十八日、晴天。意気天を突き出発す。今日こそ三埠突入の日である。寺前坪で敵の前衛と遭遇、難なく撃退し進撃する。部隊が三埠の北側に進出したのは午後四時頃だった。部隊長は、第四中隊に長沙突入、三埠攻略を命じた。

根津中隊長は、直ちに、各小隊長並びに指揮班長を召集、長沙突入の任務を告げ、各小隊の部所及び任務を定め敵情偵察を命令する。前面の地形は、我が第四中隊のいる地点から長沙の裏側まで一帯に沼地となっていて、竹で編んだ幅一メートル程の栈橋が部落の右端左端まで四〇〇メートル程、左右に蛇行するようにのびている。部落の左側は一面樹木に覆われて地形その他一切不明である。栈橋の終わる辺りに一段高く丸木橋があり敵

兵の右往左往する状態が肉眼でもはっきりと望見できる。

部隊長から「速やかに突入せよ」と督促がくる。しかし、陽のある中にこの一本の栈橋を突撃路として盲進すれば敵の術中にはまり、多大の犠牲者を出すことは、火を見るより明らかである。愚をおかしてはならぬ。賢明な方法は日没を待つて、舟艇により、部落左側に渡河して、一気に突入することである。民船の搜索が懸命に行われて第二小隊により小舟を一艘発見できたのは、既に夜半過ぎであった。

まず三宅見習士官以下若干名が長沙東端に上陸し橋頭壘を確保、引き続き、中隊主力の渡河が反復され、一刻の後集結が完了する。暗夜を利用した隠密行動は敵に察知されることはなく、成功だった。時を移さず長沙市内に突入した。敵は我が奇襲に為すところなく僅か抵抗したのみで陣地を放棄、西方に遁走した。時に二十九日午前二時であった。

対岸新昌に対する攻撃は早朝を期して強行された。中隊は折柄、幸運にも下流から遡行してきた軍協力の鉄船（中国人運転）を利用、五〇〇メートルを越える青坦河を渡河、新昌市街に敵前上陸を敢行。敵の抵抗を排除し、またたく間にこれを撃退、部落掃討を行う。山崎隊は更に荻海に突入、これを占拠する。

三埠攻略は、根津隊の果敢な攻撃により、独立第六十六大隊当初の目標を鮮やかに達成したのである。ト号前段第一期作戦は三埠攻略とその後の対陣戦をもつて一区画とするが、本作戦に於いて、特筆すべきは、我が中隊は一兵も損なうことなく、多大の戦果を収めた事で正に天佑と言つてよい。

三埠攻略後、第四中隊は主力を荻海東側に、一個分隊を荻海西端に配し、主として西南方に後退せる敵と対峙する。三埠南方二〇キロにある要衝台山も既に我が友軍の手中に帰した。敵は執拗にも、荻海の奪回を計り、数度にわたり、襲撃を反

復したが、その都度、我が方の反撃により手痛い打撃を受けて敗退した。

敵主力は長沙西方四キロ附近の部落に盤踞し、虎視眈々と三埠奪回の機会を狙っていた。部隊はこの敵に対し、再三に亘り、夜襲を敢行、敵を撃退した。我が第四中隊も可動兵力を投じて戦鬪に参加した。また一部兵力をもって威力を荻海西端に配し、主として、西南方に後退した敵と対峙した。三埠南方二〇キロにある要衝台山も、既に我が友軍の手中に帰したと聞く。

荻海西方六金山方向、及び三八^{あぐ}坏^わに対しても我が中隊は一部兵力をもって威力偵察を行い、その都度、若干の抵抗を受けたが、有力な敵兵がないことを確認した。

二カ月半に近いこの対陣戦に、若干名の入院患者を出したが、幸いにも中隊からは、一人の戦死傷者を出さなかった。

三埠攻略戦記の大綱

三埠を攻略した大隊は、第四中隊を新昌、荻海に配し西南方向の敵と対峙させた。第二中隊は依然、長沙西北及び梁金山（海拔四五三メートル）附近台地を迎えていた。第一中隊は長沙西郊にあつて、敗走の敵の反撃に備えて第三中隊は、予備隊となつて長沙東部の部落に仮駐した。大隊本部は長沙中心街の青坦河畔の商店等に分散してあり、山砲一個中隊が配属されていた。

六月二十九日午後二時、旅団主力は台山県城を攻略したとの報が入ってきた。

三埠は青坦河上流に位置する富裕な街であり、物資の集散する商業都市であると共に、華僑の家郷でもあつた。台山、関平、恩平等の諸県は、田園聚落の中に高層の住宅が林立し、その窓には自衛の銃眼が、他の家屋と連繋して作られ、部落周囲も、刺のある太い竹や、煉瓦の塀がめぐらしてあつた。恐らく土匪も、この富める部落を攻撃したのであろうし、それがための部落ぐるみの自警、防御の態勢がとられていた。

三埠攻略は、欧大慶の西南工作の後拠をも兼ね、第二期作戦準備の前進基地でもあった。また、物資の収集等についても効果のある地域でもあった。

このため、この地の失陥は敵にとっても痛手であつたと推測され、当然、毎夜の如く夜襲があり、周辺部落への敵部隊接近等がなされ、期をみての奪回作戦が繰り返された。

当初一カ月余は、大隊あげての出撃は、新昌方面に一回、長沙西方竜山附近に三回あり、他に各中隊毎の先制討伐、索敵行軍が行われていた。

特に我が中隊の荻海の分哨に数次にわたり敵の奪回作戦が繰り返された。三人の手記により夜襲の状況を語ると共に、三埠攻略戦記の締め括りりたい。

荻海の敵襲

〔夜襲 (一)〕 山崎 純 夫

荻海の浸透作戦も終了したので、市街西端の望

楼のある三階建の建物に川口曹長を長とする分哨を設置し、軽機一、擲弾筒一を配置した。

第四中隊は尖兵中隊となり、今晚、新昌、荻海に突入したばかりで、第一、第二小隊は中隊本部分ともに新昌方面でまだ作戦展開中であつた。第三小隊は中隊主力と合流するため前記川口分哨を残して南進した。

薄暮に近く、時折散発的な小銃の音を聞くのみで、人一人見当たらず尻尾を巻いた犬を見かけただけだつた。分哨から二キロ余り離れた丘陵を占拠した時、日はとっぷり暮れていた。この上、目指す中隊本部の位置も不明なので、本夜はここで野営の上、翌朝合流することとし、歩哨二人を立て、仮眠に入った。

ウトウトした時「敵だ！」の声に全員跳び起きて戦鬪体制をとる。敵の姿は見えないが、ヒタヒタと近づく足音が聞こえ、かなり近くまで接近した様子だ。敵の兵力は不明。かつ地形も判らない。咄嗟の判断で防備を半円型に切り換え、もし

敵が突入して来たら手榴弾を投げ突撃する決心をし、鉄帽をかぶり、着剣させる。

じりじり迫って来る敵の気配がふいにピタッと止まった。敵も、我が方が転進したのか死守しているのか判断に苦しんだのだろう。呼吸を止めて我が陣地を見守っている様子だった。夜が明ける前に敵は潮の引くように引いていった。それは、一瞬といえは一瞬、長かったと言えば長かった夜であった。

〔夜 襲 (二)〕 川 口 忠 保

新昌に上陸した根津中隊は左から一、二、三小隊（山崎小隊）と配置された。山崎小隊は荻海の敵の抵抗を排除しつつ前進、部隊の西に最前線陣地を確保した後、部隊の突端に川口曹長を長とする分哨を配置し、主力は中隊に合流するため南進した。分哨は煉瓦造りの望楼のある建物で、最前線の拠点として絶好の地点である。

私は建物に入ると早速、井花、露崎、千葉各兵

長、及び武井上等兵に陣地構築と炊事を命じ、松村兵長、桑原上等兵を率い、敵襲に備え前線の地形状況の偵察に出かけた。

初夏とはいえ、真夏のような暑さの中を歩き廻り、数時間で軽機、擲弾筒の夜間射撃の標準設定を完了して分哨に戻り、建物の入口の扉と、ガツシリした鉄格子を固く閉鎖した。この建物は避難して無人であったが、日本に留学した軍人の住宅らしく、壁には鎌倉や熱海で撮った写真が飾ってあった。

交替で武井上等兵自慢の野戦料理に舌づつみを打ちつつ、江門を出発してからも一週間になるがまだ一発も射っていない。今日か明日あたり火を吹くかなと思う。緊張の中に占領第一夜は無事に明け、翌日は再び兵器の手入れ、地形偵察を行う。

夕刻になった、立哨中の武井上等兵が前方二千米ートル附近に人影が見えると報告してきた。占領以来、人っ子一人見えなかったので「さてこそ

敵」と色めき立つ。大きな太陽が西の山々の蔭に隠れた。交替で三階で仮眠をとる。その合間に再び一階の入口の鉄格子や夜間射程の標識等の点検をなし、ほっとして時計を見ると夜中の二時を指している。外を見ると東の方にポツカリと大きな月が出ていた。突然、前方数百メートルの地点から猛烈な射撃が始まった。

「スワ！ 敵襲」仮眠中の兵も飛び起き、全員、配置についた。私はその一人、一人の顔を眺めた。緊張の中にも自信に溢れた顔であった。千葉兵長の配るコーヒー茶碗の水で喉を潤し気を落ち着かせる。「敵が近づいた」という井花兵長の声と同時に七、八百メートル前方の十字路からチェツコの猛射を受ける。露崎・松村両兵長が沈着に応戦する「武井・桑原！ 側面に気をつけろ！」と怒鳴る。

数分、いや数十分射ち合っただろうか、敵の射撃が間遠くなつたなと思つていたら「曹長！ 入口の鉄格子が危ない！」と千葉兵長の叫び声がす

る。ガタガタ鉄格子をゆさぶる音が聞こえてくる。「よし！ 今度は手榴弾だ」。轟音と数発の手榴弾の次々と炸裂する音。たまらずに敵は死体と負傷者を残し一旦退いたが数分後、負傷者收容の為、再び来襲してきた。

待つていたとばかり手榴弾のお見舞だ。やがて敵は襲撃をあきらめ水田の中を退却し始めた。この敵をめがけて、折からの月明かりを利用して軽機・小銃で射ちまくる。「川口曹長！ 全員、無事か」、部下数人を引き連れて駆けつけてくれた山崎小隊長の叫ぶ声に初めて我にかえり、全員の無事を確認、一同顔を見合わせてにっこり笑い、明日の健闘を誓った。

〔夜 襲 (三)〕 藤 間 政 治

三埠を占領してから数日が経ち、避難していた住民もポツポツ街に帰り始め、もう十日もすれば青空市場ぐらい立つのではないかと思われる雰囲気となつた。

三埠はもともと、功成り名遂げた華僑が錦を飾って帰って来た所で、広東ほどのにぎわいこそないが、川に面した落ち着いた風情の街であった。この三埠における時期は束の間であったが良い休養となり、疲れ切った兵達は次第に顔色も良くなり、生気を取り戻していった。しかし、その間にも、次期作戦に備え、大隊本部と各隊の間には、伝令の往来が頻繁になっていた。

突然、ある日、荻海の街から人影が消えてなくなった。そして公道の丘陵にチラチラと人影が動く。

「怪しい、何かある！」。分哨長として、私は直ちに兵器、戸締まり、非常食等の総点検を指示する。軽機は桑原、擲弾筒は田島・長橋、小銃は川口・高羽・小出と、いずれも「つわもの」揃いである。

夜半過ぎ、遂に来た。「タツタツタツ！」。チェッコが火を吹いて射ち込まれ、防壁に当たって跳ね返って凄まじい音をたてる。これに対し我

が軽機も屋上から火を吹く。しかし、敵は第一回目の荻海夜襲にこりてか、チェッコと小銃の乱射のみで、全く近づいて来ない。激しく射合っている最中、山崎小隊長が畔道を伝い救援に駆けつけてくれた。

公道上から救援の三上・目黒両上等兵が軽機で援護射撃を始める。兼子上等兵は小銃を射つ。それに呼応して、分哨からも軽機が唸り、長橋の射つ擲弾筒が適確に敵を捉える。

どの位の時間が経つたのだろうか。射撃を続けていた敵のチェッコが急にバタツと沈黙し、それつきり音を立てなくなった。

この間を利用して、素早く小隊長以下の救援隊を分哨の中へ入れ、全員の無事を喜び合う。敵は去った。翌朝見たものは、数人の遺棄死体と小銃とモービルの弾倉だった。

【解説】

筆者山崎純夫氏の所属部隊、独立混成第二十二

旅団、独立歩兵第六十六大隊、第四中隊在隊中の
体験の略歴史である。

独立混成第二十二旅団は、昭和十七年十二月十
三日、軍令陸甲第一〇七号により編成が命ぜられ
た。これは第一独立歩兵隊の、三個大隊を基幹と
し、山砲兵大隊、工兵中隊、通信中隊、各一を
もって編成された。そして同年同月十七日に広東
市に於いて編成を完結した。

独立歩兵第六十六大隊についての説明によれ
ば、独立混成第二十二旅団隷下の前任大隊として
発足した。

これに前後して将校・下士官・兵が各隊に配属
になった。そして、兵の内容は、昭和十四年八月
補充兵を中心とし、宇都宮師団の現役兵、更には
第一師団管区の新補充兵、更には、昭和十七年九
月補充の若い兵には、東北出身者が多かった。

独立歩兵第六十六大隊長、井上進大佐は陸士出
身の現役将校で、シベリア出兵時尉官にして功五
級の金鷄勲章を拝受していた歴戦の勇士であつ

た。

昭和十九年、連合軍の艦艇は日本近海に出没
し、長距離爆撃機（B 24・29）は、爆撃を盛んに
し、我が船舶の航行は困難となり、南方との幹線
は陸路に求めるため、大陸打通の湘桂作戦が発起
された。

我が兵団（第十一軍、第二十三軍）も、この作
戦に全兵力を結集し、昭和十九年六月、南京より
西方に作戦を発起した。これが秘匿名一号作戦で
ある。

部隊は、広東省より広西省へと進撃し、警備兵
団より作戦兵団とし、爾後、戦闘を重ねつつ西方
へと進撃した。

第一、第二期と作戦は続けられたが、本体験記
は、その緒戦、三埠攻略戦、梧州戦等及び、戦闘
参加下士官の手記をも掲載してある。